

近代文学研究叢書

第三十八卷

昭和48年7月31日 印刷

昭和48年8月20日 出版

[¥ 2500]

著者 昭和女子大学近代文学研究室

発行者 東京都千代田区神田錦町三丁目十四番地
小林寅次

印刷者 梶原忠幸

東京都世田谷区太子堂一丁目七番地

電話番号 03-570-8675
振替口座 422
代表番号 5-131-1

近代文学研究叢書

第三十八卷

昭和女子大学

近代文学研究室

監

修

吉村本保人浜能成中内辻玉島山佐佐姫佐坂木河金片荻岡太上石石池

田松間見勢瀬林井田伯藤沢今本嶋子桐原田井森田田
坂藤村宮侯木由井保
徳澄定久円頼正謙幸謹梅幹美実健顕三磯延吉龜
太八五泉

夫孝雄都吉郎賢勝二灌鑑助二允友二明郎郎修英二智水生郎吉男貞鑑

(国)近(国)近(国)近(美)國(近)英仏英國比英文國獨國英(和)歷(英)和(佛)近(比)英
(代)文(代)文(代)文(語)代文文文文較文法文文文文史文文文文文文文文文文文文
(文)學(文)學(文)學(學)學(學)學(學)學(學)學(學)學(學)學(學)學(學)學(學)學(學)學(學)

口 絵 写 真

坪		江
内	バジル・ホール・	見
道	チエンバレン	水
遙		陰

江見水蔭 (1)

→筆蹟（巖谷小波宛書簡）明治二十一年七月



←肖像



←「今弁慶」—明治二十四年五月（昭和女子大学藏）



→「漂漂佐々木盛綱」—江戸紫 明治二十三年十月所載
「水蔭叢書」—明治四十三年八月刊（昭和女子大学藏）

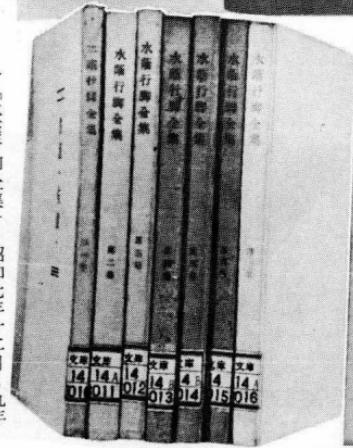
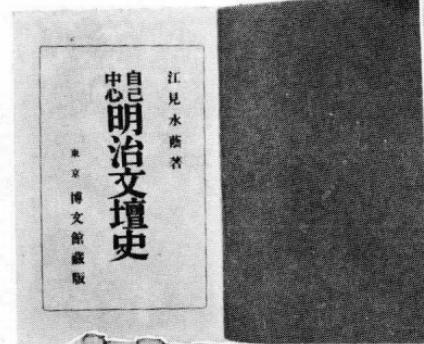


（昭和女子大学藏）

→「女房殺し」—文芸俱楽部 明治三十八年十月所載
「加藤清正」—明治二十七年十月刊

江見水蔭(2)

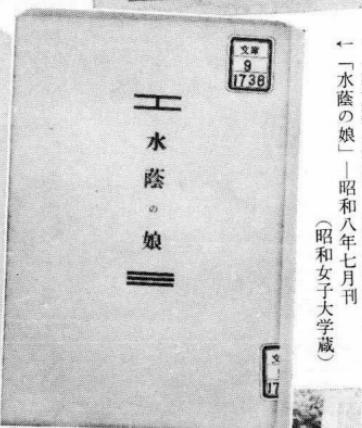
→ 「自己明治文壇史」—昭和二年十月刊
 (昭和女子大学蔵)



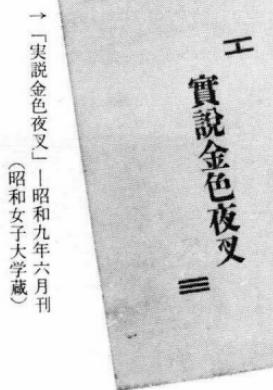
→ 「水蔭行脚全集」—昭和七年十二月刊
 (昭和女子大学蔵)



↑ 「観友社と紅葉」—昭和二年四月刊
 (昭和女子大学蔵)



← 水蔭の墓—谷中墓地

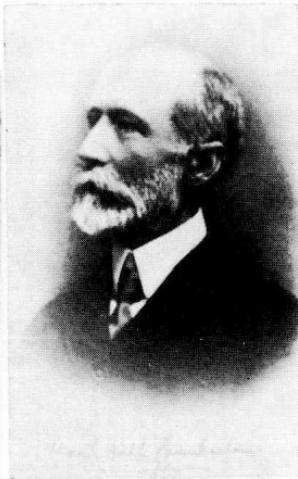
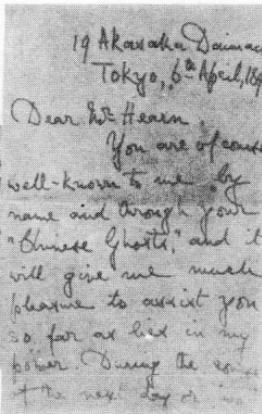
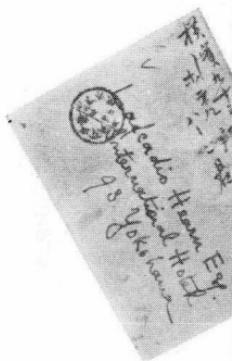


→ 「実說金色夜叉」—昭和九年六月刊
 (昭和女子大学蔵)



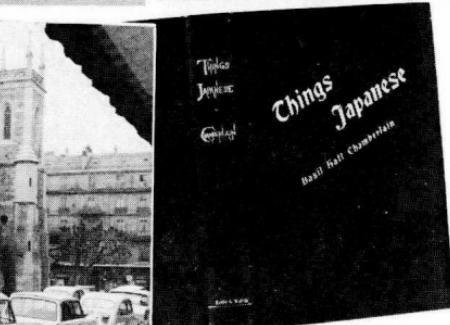
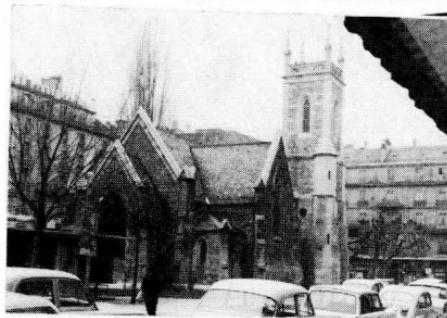
バジル・ホール・チェンバレン

筆蹟一ハーン宛手紙



←肖像

→英國教会—ジュネーヴ



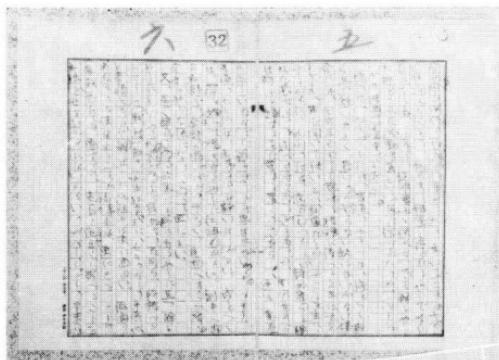
Wasōbyōye, THE JAPANESE GULLIVER.
BY
R. M. CHAMBERLAIN.

A SHORT time ago, while turning over some dusty volumes in an old bookshelf here in Tokyo, I lighted, in one of the upper compartments, upon a small volume bound in a thin, pale green paper, and pasted at the back of it a company of prints—apparently Japanese—of which I have not been able to identify any, except possibly by a reference in the letter-piece to be served. "Wasōbyōye," the title of the volume, was written in a bold, simple, and expressive hand, which I have not seen elsewhere before or since. He does not find any Lilliput, it is true, nor any Brobdingnag, nor any Laputa, nor any Glubbdubdribb, nor any飞 to the Land of the Flying Pantes, to the Land of Shaven, to the Land of the Little People, or to the Land of the Big People; but the work is quite a short one, Japanese volumes often consisting, as we have seen, of little more than a few pages, and this will have, of less than a few pages. There nevertheless, we found it written, in a very clear and legible hand, that the author, evidently that to the Land of the Anteaters, would lead us to make generally intelligible, even with an array of notes and illustrations, the history of the Japanese people, and their manners and customs. The author, as well as the name of the volume, is unknown to me, but the title is very like that of "Gulliver's Travels," and the Land of the Goblins—a translation of which, I believe, is now in print in English, though I have not seen it—but a few lines in the middle of the first section; and the author, I suppose, is the author of the original "Gulliver's Travels," or at least of the "Japanese Gulliver," which bears date 1875, has an English introduction or preface, by which it is explained that the author, who had been a member of a mission sent to Japan, had copied the imitation of the present work, and had given it to his son, who had translated it into English. This is probably the case, for the original "Gulliver's Travels" is a specimen of the modern literature of England, and the author of the present work, I suppose, may well like to write away on his own the history of his country, and to do it in a style which he thinks appropriate. The author of the present work, however, has done this, and has given it a title which is not very appropriate, but which is very good, and which I hope will be remembered.



坪 内 遣 遙 (1)

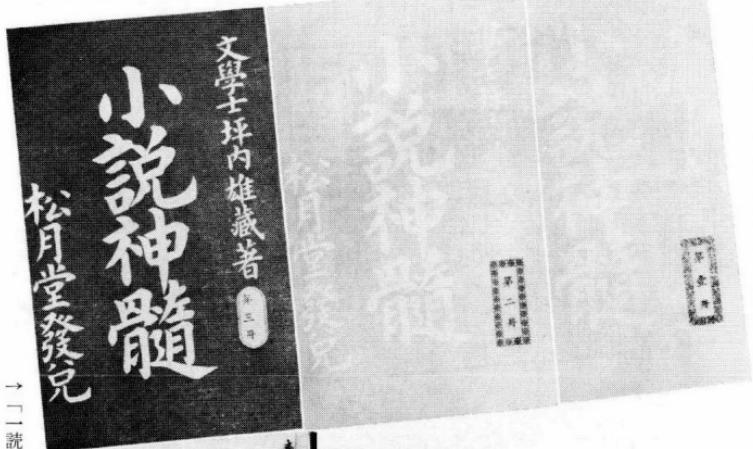
→筆蹟(昭和女子大学蔵)



←肖像



←「小説神髓」—明治十八年九月十九年四月



→「一讀三歎當世書生氣質」—昭和十八年六月刊
(昭和女子大学蔵)



←「未來の夢」—明治十九年四月刊

「該撤奇談」
明治十七年五月刊
(昭和女子大学蔵)

坪 内 道 遙 (2)

「桐一葉」—早稻田文学 明治二十七年
十一月所載（昭和女子大学蔵）

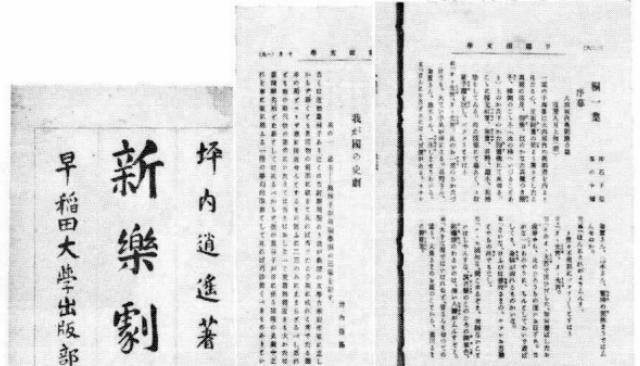
旧居雙柿舎—静岡県熱海市

←「理論の事業化とお祭り氣分の敵化」
—早稻田文学 大正十年一月所載

新 樂 刺 論

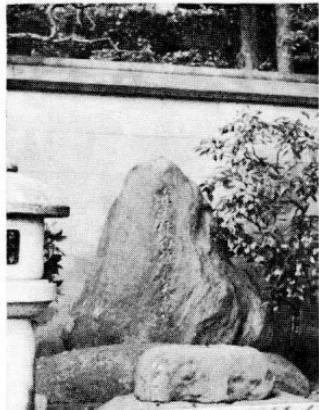
早稻田大學出版部藏版

坪 内 道 遙 著

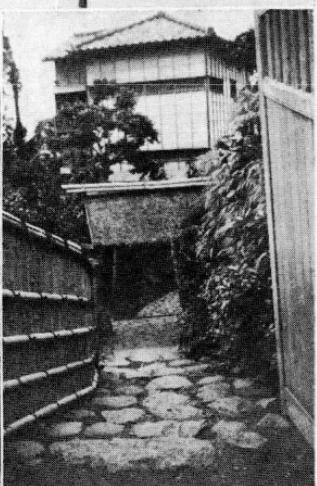


→「我が國の史劇」—早稻田文学 明治三十六年
十月所載

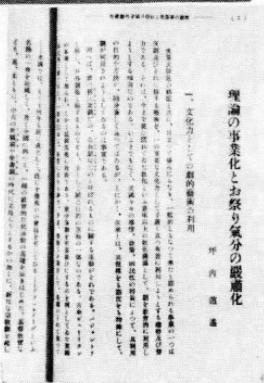
「新樂劇論」—明治三十七年十一月刊
〔昭和女子大学蔵〕



→道遙の墓—熱海市



→筆塚—雙柿舎の庭内



目

次

卷	近 坪	第三十八卷の成 立	口
代	内	江 凡	三 十 八 卷 の 成 立
末	文 芸	見 水	例
付	年 表	バジル・ホール・	昭 和 女 子 大 学 近 代 文 学 研 究 室 : (一〇)
		チエン・パレン	昭 和 女 子 大 学 編 集 室 : (一三)
		記	近 代 文 学 研 究 室 : (一五)
			近 代 文 学 研 究 室 : (一七)
			近 代 文 学 研 究 室 : (二五)
			近 代 文 学 研 究 室 : (四〇)
			近 代 文 学 研 究 室 : (四五)
			近 代 文 学 研 究 室 : (五五)

第三十八卷の成立

本巻は昭和期第十三巻として、昭和九年一月から昭和十年二月までに歿した左記三名の研究調査を収めた。

江見水蔭は小説家。本名忠功。明治二年（一八六九）父銳馬、母友の長男として岡山市大字一番町に生まれた。家は代々池田藩の武家。明治十四年、軍人を志して上京したが文学へ心を向け十八年称好塾に入る。ここで巖谷小波、尾崎紅葉を知り硯友社同人となる。二十二年「文庫」に「旅絵師」をのせ文筆活動に入る。二十五年自ら「江水社」を設立して個人雑誌「小桜縞」を発刊、独自の詩情豊かな短篇を発表した。このころから懲作の傾向を示し「初霞」（都の花）「焼山越」（読売新聞）などを多作した。二十七年十月中央新聞記者として小説専門となる。日清戦争の勝利にわいた時宜を得て「夏服士官」を掲載、好評を得た他「女房殺し」「炭焼の烟」など発表、作家として脂がのりきっていたが生活の破綻から読売新聞を経て神戸新聞に都落ちする。三十二年、博文館に入社。週刊新聞「太平洋」主筆となる。「旅役者」「水の魔術」など中央文壇への復帰を飾るに足る作品を上梓、三十四年には「小桜縞」復刊。一方相撲に力をいれ国技館は水蔭の命名という。又「オセロ」の翻案により新劇と文士の接觸の道を拓くなど多彩な仕事ぶりで晩年は講演と揮毫の旅を続け「水蔭行脚集」全八巻を上刊。「硯友社時代—隠れたる硯友社作家」を執筆、文学史研究に貴重な資料を提供した。昭和九年十

一月、六十五歳で客死。

バジル・ホール・チャンバレンは英國の日本研究家、言語学者。嘉永三年（一八五〇）十月十八日、サウスイー（ボーリマス）に、父ウィリアム・チャールズ・チャンバレン（英國海軍提督）と母エライザ・ジェインの長男として生まれた。八歳で母と死別し弟二人と祖母のもとで暮らした。病弱の為オックスフォード大学進学も断念したチャンバレンは、健康回復のための遠洋航海で横浜に着港したのが明治六年五月、二十三歳であった。以後四十年近くにわたる日本滞在生活を送った。専ら日本語及び日本文学の研究に終始し、かたわら帝国大学で博言学（言語学）、和文学（国語学）を講じ、一方、著作活動も活潑であった。労作「古事記」の完訳、アイヌ語の研究として「^{より見た}日本語、神話及地名」の論考を帝大紀要に発表。又「日本小文典」は日本人の國語学研究勃興の導火線となり、「日本口語文典」は当時の日本における新分野を開拓したものとして画期的成果をもたらした。明治二十三年帝大を退職後は一旦帰英、その後度々日本を訪れて著作をしつつ四十三年の九州旅行を最後に四十四年日本に永訣、昭和十年（一九三五）一月十五日スイスで八十五歳の長命を全うした。著書は前記の他に「日本風物誌」「日本の詩歌」「鼠は生きてゐる」等多数。

坪内逍遙は小説家、評論家、劇作家、劇評家、英文学者、翻訳家、教育者。安政六年（一八五九）五月、父、代官平之進、母ミチの末子として岐阜で生まれた。号は春のや主人、春のやおばら、柿叟等。修学時代、外人

教師から語学、シェイクスピア講義を受ける。明治九年上京開成学校入学。高田早苗と親しみ西洋文学熱にひきこまれる。戯作文学と西欧の近代的文学の違いを明らかにしようとつとめ「小説神髓」「当世書生氣質」を作す。演劇方面の改良運動としては勧懲の具にせずあくまで人情を写すべきことを主唱。鷗外との文学論争「没理想」論は約九ヶ月にわたり「しがらみ草紙」「早稻田文学」誌上に展開された。二十九年早稻田中学の創立に参与、教頭、校長を勤めて青少年教育に尽力。時勢に対する倫理、道徳教育の重大さから文芸活動を控え、その後は演劇への関心とシェイクスピア作品の翻訳に集中した。四十二年、逍遙邸内に演劇研究所を設立、主として西欧の劇を上演した。大正四年早大を退き熱海に双柿舎を営み終焉までこの地に居住した。彼の道義的常識的文芸觀による文芸教育上の功は大きく特に演劇の革新に大きな力となつた。又文壇早稻田派の総帥として多くの文学者を育てた。昭和十年一月、熱海雙柿舎で死去、享年七十六歳。

（昭和女子大学近代文学研究室）

凡例

一 著作年表は、発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを収め、資料年表は、第三者の考説、論評、感想等の文献を収めた。単行本の中での編集物は、所要の小題を書題名欄に、書名と発行所を誌紙名欄に、小題の執筆者を筆者欄に掲げることとする。

二 各稿の末尾に「採訪」と「文献」を掲げたのは、研究調査の際に訪問して教示を仰ぎ、便宜を与えられた方々に感謝の意を表すると同時に、資料の出所、起稿や修訂に当って参考した文献書目を記して、その依拠を明らかにした。ために資料年表と一部重複することがある。なお採訪した人の記名は年齢（推定）順、文献の記載も発表年次順にした。

三 引用文はすべて原文に従い、外国文の場合は訳文又は大意を添付する。なお原文中の誤りや疑わしい箇所の右側に（マ）と記入する。

四 邦人氏名は旧漢字を用い、見出しに振りがなをつけ、外人名の初出は原語を付し以下片かなを用いる。なお外国の国名、地名、人名は片かなを原則とするがすでに日本語化しているものは漢字を用いる場合もある。

五 年代に日本年号と西暦とを適宜織りませて、どちらからでも検索できるようにした。年齢は満年齢を用いたが、場合によつて数え年何歳と記すこともある。

江え

見み

水すい

蔭いん

昭明
和治二
九年年
（一八六
三六四九）
一八一月
月十二
日生